令和８年度　全国学力・学習状況調査結果と考察

令和８年１１月１６日
東御市教育委員会

令和８年４月２３日に実施されました全国学力・学習状況調査の東御市小中学校の結果の概要について報告いたします。

☆ **調査の目的**

・義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
・学校における児童生徒への学習指導の充実や、学習状況の改善等に役立てる。
・そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

Ⅰ　児童生徒に対する調査

１　教科に関する調査

教科に関する調査（小学校：国語、算数　中学校：国語、数学、英語※）
※英語は、文部科学省 CBT システム（MEXCBT）によるオンライン方式で実施。

次の内容を一体的に出題。
①身に付けておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容や、実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能等
②知識・技能を実生活の様々な場面に活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力等

２　調査分類・区分

小学校	国語	算数
分類	区分	区分
学習指導要領の内容等	知識及び技能 ☆言葉の特徴や使い方に関する事項 ☆情報の扱い方に関する事項 ☆我が国の言語文化に関する事項 思考力、判断力、表現力等 ☆話すこと・聞くこと ☆書くこと ☆読むこと	☆数と計算 ☆図形 ☆測定 ☆変化と関係 ☆データの活用
評価の観点	☆知識・技能 ☆思考・判断・表現	☆知識・技能 ☆思考・判断・表現
問題形式	☆選択式 ☆短答式 ☆記述式	☆選択式 ☆短答式 ☆記述式

中学校	国語	数学	英語
	区分	区分	区分
学習指導要領の領域等	知識及び技能 ☆言葉の特徴や使い方に関する事項 ☆情報の扱い方に関する事項 思考力、判断力、表現力等 ☆話すこと・聞くこと ☆書くこと ☆読むこと	☆数と式 ☆図形 ☆関数 ☆データの活用	☆聞くこと ☆読むこと ☆話すこと（やり取り） 話すこと（発表） ☆書くこと
評価の観点	☆知識・技能 ☆思考・判断・表現	☆知識・技能 ☆思考・判断・表現	☆知識・技能 ☆思考・判断・表現
問題形式	☆選択式 ☆短答式 ☆記述式	☆選択式 ☆短答式 ☆記述式	☆選択式 ☆短答式(含む口述式) ☆記述式(含む口述式)

Ⅱ　児童生徒を対象にした質問紙調査

１　学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する質問紙調査

小中共に、文部科学省 CBT システム（MEXCBT）によるオンライン方式で実施。

主な調査項目は

・基本的生活習慣、学習習慣、読書等
・主体的・対話的で深い学び、ＩＣＴを活用した学習状況
・自己有用感・心理的安全性等、向社会性、学びの自己調整
・総合的な学習の時間、学級活動、特別の教科道徳
・教科（国語、算数・数学、英語）の学習状況、意識

Ⅲ　結果

１　概要

○東御市における科目別平均正答率について

・小学校は、国語、算数ともに、全国平均よりやや低い結果であった。
・中学校は、国語、数学、英語ともに、全国平均よりやや低い結果であった。

２　小学校　教科別考察

（１）小学校国語

本市児童は、「文章を読んで考えたことを自分の経験と結び付けてまとめる」設問では全国平均を超えるなど、「自分の考えを持つ力」に強みがみられ、市として力を入れてきた「対話による学び」の成果が表れつつあると考えられる。

その一方で、同様の記述式の「情報を活用して自分の考えが伝わるように書く」ことが求められた設問では正解率が下がるなど、「複数の情報の整理・関連付け」「必要な情報の引用」「根拠をもとにした考えの形成」「条件に従った表現」という、より複雑な思考が求められる問題で課題がみられた。

今後は、「情報を根拠にして考えをつくる過程を、授業の中でどう支えるか」という視点から授業を見直し、定着しつつある「対話による学び」の質的な向上を図って、「思考・判断・表現」の力とともに、「知識・技能」も一体的に伸ばしたい。

（2）小学校算数

本市児童は、「基本的な数量・図形について」や、「直接的・具体的な数量処理」で力を発揮し、「無回答を避けようとする姿勢」を持っているところに「強み」がみられた。

その一方で、「分数の大小を判断し、その理由を説明する」設問など、「知っていることを使って考え、判断し、説明する」問題に苦手さがうかがえた。

今後は、日常の授業の中での「考える・説明する・比べる・振り返る」という場面の明確な位置付けを意識し、特に「根拠を説明すること」が当たり前になるよう、「答えから問題を考える」活動や、「この式や数量は、どんな問題場面を表しているか」等「考えを深める対話」の取組を進めていきたい。

また、「体積の意味について理解しているかどうかをみる」設問をはじめとして、やや複雑な文章で出題されている問題についても苦手さがうかがえたことから、「式を立てる前に、数量の関係をとらえ、構造化する」取組についても、児童間の学力差に目を向けながら、大切に位置づけていきたい。

3　小学校の児童質問紙

〇概ね満足でき今後も力を入れていきたい項目　　●今後力を入れていきたい項目

〇「自分にはよいところがある」と答える児童が年々増えてきており、大変多くの児童が肯定的な回答を寄せて、全国平均をやや上回った。

〇「困りごとや不安がある時に先生や学校にいる大人にいつでも相談できますか」「先生は，あなたのよいところを認めてくれていると思いますか」という設問への回答も昨年度より更に増加した。子どもたちの姿を肯定的に受け止め、支援している教師の姿勢は今後も大切にしていきたい。

〇「自分と違う意見について考えるのは楽しいと思いますか」という質問に対して、肯定的回答の児童が昨年度よりもさらに増え、全国よりも明確に高くなっている。他の「対話的な学び」に関わる質問でも向上がみられることから。市を挙げて取り組んできた成果が、数字になって表れてきていると考えられる。

〇「学校にいくのが楽しいと思いますか」についても、昨年度よりもさらに増えた。自己肯定感の高まりや、教職員の肯定的な支援もあっての結果だと考えられるが、子どもたちが自分らしくのびのびと力を発揮できる学校づくりを、今後も進めていきたい。

●「学校の授業時間以外に、普段１日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか」の質問では、１時間以上の学習時間が全国平均に比べて少ない。昨年度よりも、「30 分以上１時

間未満」の児童の割合は増えたが、全体的には、家庭での学習時間は減少してきており、学校が休みの日の学習時間の減少もみられる。クロス集計でみると、学習時間の長さと成績の相関関係が明確に認められるわけではないが、より充実した家庭学習のあり方とその支援は今後も検討を続けていきたい。

●ICT 機器の活用技能については、「文章の作成」「情報の収集」「情報の整理」などは、「できる」と答えている児童の割合が全国とほぼ同等なのに対して、「プレゼンテーションの作成」については低くなっている。国語や算数で求められている「対話により考えを深めて、表現を更新する」という授業改善の方向と重なる部分があるので、各校での取組を積極的に促していきたい。

4　中学校の教科別考察

（1）中学校国語

本市生徒は、全般的に、言葉の働きや文法に関する選択問題では正答率が高く、「言葉そのものを知っている」ことが「強み」と考えられる。また、単に文章を書くだけでなく、言葉を選び、表現を工夫して伝えることについて、一定の力が身に付いており、「自分の考えを表現する力」の土台はできていることもうかがわれる。

課題としては、文章を「読んで理解する」だけでなく、「必要な情報に着目して整理し、意味をとらえる」「根拠をもとに評価・解釈する」などの、複数の思考を必要とした場面での力の発揮があげられる。

生徒質問紙で、国語の授業に関わっての多くの設問で肯定的な回答が寄せられていたことを生かしながら、今後、「答えを見つける読解」から「どこを根拠に、なぜそう考えたのかを説明する読解」への転換を更にすすめたい。具体的には、「読む→考える→対話する→考え直す→表現する」という学びのプロセスをたどりながら、「なぜそう考えたのか」を、文章中の根拠をもとに語り合い、自分の考えをつくり直す授業が積み重ねられるようにしていきたい。

（2）中学校数学

本市生徒は、「基礎的・基本的な数学の知識・技能」は一定程度身についていることや、「問題場面や資料を読み取って数学的な対象をとらえる力」は一定程度育っていることが「強み」といえる。

それに対して、「数学的に表現したことを事象に即して解釈し、問題解決の方法を数学的に説明する」ことが求められる設問や、「2 直線が平行になるための条件」「2 つのサイコロの出目の確立」などの基礎的な力が問われながらも、問題文自体が少し複雑になっている設問については、無答率が高い傾向がみられるところに課題がある。

生徒質問紙で、「考え方を説明する活動」や「文字式を用いた説明や図形の証明」に係る設問に関して、肯定的な回答が低かったことから、毎日の授業の中で「説明する」取組を意図的・継続的に位置づけて、「数学的な考えを、数学的な言葉・数・式を使って説明できる力」を高め、より確かな知識・技能の獲得につなげていきたい。

また、「説明する活動をよく行っている」という設問の肯定的回答と、「文字式を用いた説明や図形の証明を読んで、かかれていることを理解することができる」や「数学が

好き」という設問の肯定的回答には相関関係がみられることから、「教える数学（教わる数学)」から、「考え、対話し、説明する数学」への転換という視点も大切にしたい。

（３）中学校英語

本市生徒は、「具体的で必要な情報を聞き取る力」や「目的に応じて、文章から必要な情報を読み取る力」「情報を基に定型化された英文を書く力」など、基礎的な力が一定程度身についてきていることが「強み」としてあげられる。

そうした、「必要な情報を取り出す」ことは比較的できる一方、「情報同士を関連付ける」「全体として何を言っているのかを捉える」という段階に課題がみられ、「書くこと」「話すこと」の領域では、「何を伝えるのかを考え、内容を整理し、それを英語で構成する力」に課題がみられた。

生徒質問紙の英語に関わる設問では、「生徒同士で英語で問答したり、意見を述べあったりする活動」に対しての肯定的回答が低かったことから、日常の授業においては、語彙・文法の補充だけではなく、「英語の情報→自分の考え→友達との対話→考えの修正→英語で表現」という学習過程を、意図的に組み込んでいくことを大切にしたい。

また、その際は、肯定的な回答が低かった「キーボードを使って英語を書く活動」にも、積極的に取り組んでいかれるようにしたい。

５　中学校の生徒質問紙

○概ね満足でき、今後も力を入れていきたい項目　　●今後力を入れていきたい項目

○「先生はあなたの良いところを認めてくれていると思いますか」という設問や「困りごとや不安があるときに、先生や学校にいる大人にいつでも相談できますか」という設問での肯定的回答の割合が、小学校同様、全国平均よりも高かった。同様に、国語に関する設問の中でも、教師のかかわりに関わって肯定的回答の割合が高く、昨年度と比べると更に向上している。こうした子どもたちの姿を肯定的に受け止め、支援している教師の姿勢は今後も大切にしていきたい。

○「学校に行くのは楽しいと思いますか」という設問や、「自分と違う意見について考えるのは楽しいと思いますか」「友達関係に満足していますか」という設問において、肯定的回答の割合が、令和５年度から向上の傾向がみられ、全国平均を超えている。また、「あなたの学級では、人と違う意見を言っても否定されないと思いますか」という設問も肯定的回答の割合が高いことから、市で力を入れて取り組んできた「対話的な学び」の成果が、中学校でも数字として表れてきていることがうかがえる。

○「新聞を読んでいる」と回答した割合は、もともと全国より高かったが、昨年度までの下降傾向に歯止めがかかって更に高くなった。授業での活用等を継続していきたい。

○ICT 機器の授業での活用に関しては、「ほぼ毎日」と回答した割合が、全国より明確に高く、授業でのタブレットの活用が日常化してきていることがうかがえる。

●ICT 機器の活用が図られるようになった反面、活用の技能に関わる自信を問う設問に関しては、昨年度より改善傾向がみられるもののまだ低い結果になっている。教科の結果からも、「読み取った情報を構造化して理解する」ことや「自分の考えや表現を更新してい

く」という点で課題がみられていることから、ICT 機器を活用した情報整理の場面や、情報発信の場面を意図的に設定して、より積極的な活用を図りたい。

●教科の学習状況や意識に関わる質問で、「授業の内容がよくわかる」と回答している生徒の正答率が必ずしも高くないことや、無答率が高いにもかかわらず、「解答時間は十分だった」と答えている生徒が多いことにも留意し、各学校での授業のあり方の検討を進めていきたい。

●「日常的に英語を使う機会」についての設問で、肯定的回答の割合の低さがみられた。市としての環境的な要因も考えられるので、子どもたちの意欲を更に高めていくための方策を幅広く考えることも大切にしたい。